



園だより

平成30年4月26日
佛教大学附属幼稚園



常識を差し置いて

園長 田中典彦

常識ってなんでしょう。よく使う言葉ですが、面と向かって考えてみると意外と理解されていないことがわかります。このようなときには外国語に置き換えて理解する方が分かりやすいことがあります。常識は英語では common sense です。Common は「共通の」、sense は知識です。つまり私たちに共通にもたれている知識のことで、日常の生活には役立つものです。

この知識は時代と地域によって限定される性質のものでもあります。たとえば、平安時代や江戸時代の人達のもっていた常識と私たちのそれとは全同ではありません。また現代であっても、インドやアフリカの人達のもっている常識と私たちのそれとは異なっているものがあります。このことから、ある時代にある地域に生きる人々に共通にもたれていて、そこに生きてゆくためには有用で、何の思いもなく人々の中で円滑に生活するためには必要な知識であるといえます。しかしそれは、慣習などに基づいていて、その根拠が明らかでないものが多いのです。

この常識に真実を求める知を加え、社会に生きる人間としての健全な判断力をもって捉えられるのが「良識」なのです。自由や平等などは良識のうちにあるものです。

「人間とはなにか」の問いに、それは精神と肉体から成るものであるというのがインドのある時代の常識でした。これに対して「二辺を離れて中をとる」とゴータマ・ブッダが自らの立場を宣言しています。これは仏教の根本的立場を示したものです。二辺というのは二つの極端という意味であり、われわれのもつ常識のあり方をいいます。ブッダが言う二辺は当時の常識のことであり、特に思想的常識のことであります。一辺はバラモン教に代表されるものであり、他辺は六師外道として伝えられる自由思想家の思想、特に唯物説に立つ人たちの思想です。

バラモン教によれば、人間の本性は不変不滅なアートマンであって、われわれの死後も存在するとされています。これは常住論と呼ばれています。アートマンは清浄で楽を性質とするものなのですが、肉体によって束縛されているが故に苦というあり方を余儀なくされているのです。だからアートマンの解放（解脱）こそ苦を終わらせる道であると説きました。このように人間を精神と肉体とから成っていると捉え、肉体を移り変わり不浄なもの、精神こそ不変で浄なるものと考え、不浄な肉体に基づく欲を滅して精神の自由を取り戻し永遠の安らぎを得ようと苦行を勧めたのです。

一方、唯物思想を提唱する人達は、人間も他の事物と同様に地・水・火・風の要素から成るとし、肉体こそが人間の本質であって、死を以て断絶する（断滅論）と説きました。だから人生は一度きりであるから欲望のままに生きればよいとして、快樂論を唱えたとされています。

事実としての人間は、決して二つに分けて捉えることが出来ないにもかかわらず、知によって二つに分けて、しかもその一方に執着し強調することに基づいたこれらは極端説と言わねばならないと知ったブッダは、先ずこれら当時の常識を一旦さしおいて事実そのものを観察することによってこそ真実を得、智慧を完成することが出来るとし、「中」つまり純粹経験の立場を取ることを宣言したのです。

わたしたちも常識に振り回されるのではなく、それを一旦さしおいて、良識を新たな常識へと転換すべきではないでしょうか。